

# 28PA-am146

外来患者宅における冷所保管実態調査

○浅沼 克<sup>1</sup>, 田村 知子<sup>1</sup>, 池内 裕美<sup>1</sup>, 中河 陽子<sup>1</sup>, 増田 久美子<sup>1</sup>, 高山 幸<sup>1</sup>, 鈴木 範子<sup>1</sup>, 美濃岡 久美子<sup>1</sup>, 中村 博子<sup>1</sup>, 北村 味花<sup>1</sup> (<sup>1</sup>フロンティア薬局)

【目的】冷所保管薬は初回調剤時を中心に保管条件の説明を行っている。しかし継続使用している患者から保管方法に関する質問を受けることがあり、患者が十分理解をして適正な保管がされているか不安に感じるがあった。そこで今回冷所保管薬を継続的に調剤している患者に保管状況の確認と共に保管に関する説明を行いその結果を集計した。

【方法】冷所保管薬が処方された患者の同意を得て保管状況の確認と保管条件の理解についての聞き取りを実施した。保管状況や理解が不良の患者に対しては必要な指導を行った。実施期間は平成 29 年 9 月 1 日から同年 10 月 31 日とした。

【結果】聞き取り調査を実施した患者数は 117 名であった。保管状況に問題があった患者数は全体で 16 名であり、製剤別に分類するとインシュリン製剤 6、生物学的製剤 2、点眼薬 5、その他の製剤 3 であった。また保管状況は問題無いが保管条件の理解が不良の患者数は全体で 11 名であった。

【考察】保管状況不良の患者の内訳を見るとインシュリン製剤については開封前後で保管条件が異なることを理解していない患者が半数以上を占めた。生物学的製剤や点眼薬については凍結リスクのある冷蔵庫吹出し口で保管している患者が見られた。また冷所保管自体を理解していない患者も何名か見られた。いずれも継続使用している中で理解のずれや保管への意識の低下があったと考えられる。服薬指導の際に薬効や副作用の確認・指導と共に保管条件についても患者の理解度に合わせた指導が必要であることがわかった。今後は薬局でオリジナルの指導箋を作成するといった工夫をして個別かつ継続的な指導をしていきたい。